

# 月影



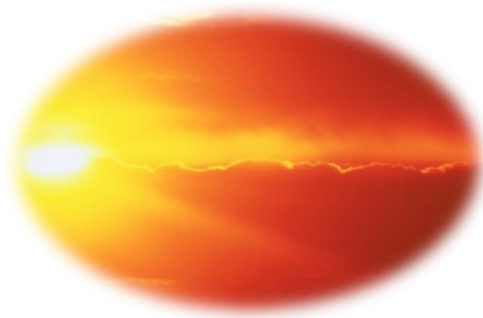
第37号

はるひがん

春彼岸

さどりの種を  
たね

まく日かな  
ひ



春と秋、昼夜の長さが等しくなり、  
真西に沈む大きな太陽に、  
西方極楽浄土を近くに感じるお彼岸。

悩み苦しみが多いこの世を此岸（しがん）。  
悩み苦しみが無い悟りの世界を彼岸（ひがん）。

惜しみなく与え

きまりを守り

耐え忍び

目標に向かって努力し

心を安定させ

物事の本質を見きわめる

お彼岸とは、

ご先祖供養とともに、

此岸から彼岸へ渡るために、

六つの徳目を実践する修行週間です。

# お経の話

何が書いてあるの？

じょうどしゅうせいざんぎょうしき

あかほん

浄土宗 西山勤行式 (赤本) 解説

けいびやくもん  
啓白文

こうみょうへんじょう

光明遍照

ねんぶしじょう

念佛衆生

じつぼうせかい

十方世界

せつしゆふしゃ

攝取不捨

訳) 阿弥陀さまの慈悲の光は、

あまねくすべての世界を照らして、

お念仏をする人々を

一人ももらさずに

救いとってくださいます。

親が我が子をいつも見守り続けているように、阿弥陀さまはその慈悲の光で、いつも私たちを包み、見守って下さっています。

この阿弥陀さまの慈悲の光は、私たちの心の中を照らし、貪り(むさぼり)・怒り・愚痴(ぐち)の三つの煩惱を消すはたらきがあるといわれています。

煩惱に振り回されている私たちが、「南無阿弥陀仏」と阿弥陀さまの御名を唱え、その慈悲の光に触れることで、煩惱なき心に生まれかわらせていただくのです。

法然上人は、この阿弥陀さまの慈悲の光を月の光にたとえて歌に詠んでおられます。

月かげの いたらぬ里は なけれども  
ながむる人の 心にぞすむ

月の光の届かない所はなく、その光は、月に気づく人にも気づかない人にも平等に照らしてくれています。でも、月の光に気づいて眺めている人の心の中で、ますますきれいに輝くことでしょう。

# あれこれ仏教用語

慈悲 じひ

「慈」はサンスクリット語で「マイトリ」。最高の友情という意味。

「悲」は「カルナー」で哀れみや情け、同情という意味。これが一つになって「慈悲」。生きとし生けるものに対する慈しみ（いつくしみ）の情を意味します。

「仏心は大慈悲これなり」とお経にも説かれているように、仏さまが、苦悩する私たち衆生を見て、救わずにはおられないと思われる心。それが慈悲の心です。

## 春のお彼岸の御案内

日時 三月二十一日（月）**春分の日**

午後一時 彼岸法要

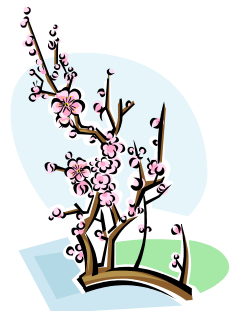
水塔婆先祖供養

午後二時 法話 常林院住職

「法然上人の御歌」

場所 常林院本堂（いす席）

皆様お誘いの上、お気軽にお参り下さい。



# 雑記抄

〓百年前の柄香炉〓

先日、本堂奥の棚の中を整理している時、古い小さな桐の箱が目にとまりました。

とても古そうに黒ずんでいる桐箱の蓋には、「梅香炉」と墨で書かれていました。

蓋をそっと開けてみると、柄香炉（えごうろ）が入っていました。

柄香炉とは柄のついた香炉のことで、法要時に香を焚きながらお導師を先導する時に使う仏具のことです。

柄香炉の本体はうす緑色で葉の形に。そして蓋のつまみは梅の花のつぼみにかたどられたきれいな柄香炉でした。

桐の蓋の裏を見ると、  
「宗祖大師七百年記念」

静空上人代

明治四十三年四月

常林院什物」

と大きく墨で書かれていました。

静空上人とは、明治三十四年から大正十一年まで常林院の第三十五世住職として当寺に住持されておられた静空舜頭上人のことです。

その静空上人が百年前、法然上人七百回大遠忌の記念に、柄香炉を当寺の什物として寄進されたと思われまます。

今年折しも法然上人八百回大遠忌の年。この節目の年に、百年前の住職が七百回大遠忌によせて寄進された仏具が目にとまりました、今、私が手にしていることは、とても不思議な仏縁を感じまます。

静空上人が、どんな思いで柄香炉を寄進され、どんな思いで大遠忌に臨まれたのか、柄香炉を見ながら百年前のことを想像しています。



百年前の柄香炉

常林院

平成二十三年三月一日発行  
浄土宗西山禅林寺派